俳諧七部集

狩みの

三

1 4
3157
23(3)

14
3157
23
(3)

青蓮角序

能諸乃集つくる事古今より
わたりくれば道はおこりて起迦
き時なれやや幻術の事一ぺ
してうれ白り魂を入さま
をゆめよ極めこうして似る
面白くしく世まるまり
ものくんようつりて百変妙変

を志しむ五德ハ以て及て
治んをこゝに通きるなり
こたり彼あり上人に骨肉
てんを作まして禪の純
為留をゆやうになん結る
ゆゑ純なる人を成て結道
ゆゑ五の禪のゆゑ純を知は
反魂乃法ゆゑをもろこの結ぶ

成ぬまして
たアイウエオらくひきく
いうれん吟禪をおめ通
し只龍猪の魂に入ゆゑ
ゆこうとて我翁行脚乃ろる
伊賀越しゆる山中ゆく
穢り小義を着せて俳諧
乃神を入ぬまし今純た

たまたま新勝れおもしを呼
ひ寄れあるに懸るべきの
術なりこれを元として此
集をつくりて猿蓑とのゝ名
付申侍る是考る所元
代んとより魂を合せる素
元非乃所書なるよまりせて
書

景樹之印

猿蓑集巻之一

冬

初しぐれ猿も小蓑をほしげ也　芭蕉

あぢきなや寺に籠るも冬の雨　其角

時雨ふや並びて通る鄙の人　千那

幾人かしぐれ過ぬく野田の橋　僧 支州

越路の雪鶴ゝ重る小屋　膳所 正秀

廣沢やひとり行人の沼堂　史邦

舟人なれまつ雲の月　尚白

伊賀の境より大和へ越る

なつかしや奈良の隣乃一時雨　曽良

時雨るゝや黒木つむ屋の窓あらし　元水

雨うけて竹切る音や炭ばし　大津　乙刀

名ばかりの月や小夜ぬれ　羽紅

新田の稲穀焼るゝ煙哉　膳所　昌房

いなづまの闇の出る帆片帆　去来

ちる葉よりやや北に星のあり　伊賀　百歳

一いろの動く地なき霜枯れ　野水

浪ちて

ちるものとおもふ船の中　其角

帰る花ちるたん延切レ　同

禅寺に雲の房やぬれ畳　元水

百舌鳥のみる松より十月　嵐蘭

こがらしや頬腫病む人の影　芭蕉

かゝりけるをみてよめる　元輔

なゝくさのうへにかゝれる白露の

撫子のうへにかゝれる白露の　伊賀　土方

濃紫をかさねて過るすゝ花の　膳所　裾道

ちやのこゝろにほふ人をみるなり　越人

そのむかしはなのゆゑにかはるらん　伊賀　猿雖

古ちゝ貴ゝもまさりけるかな　元輔

翁の宴四方の春をぬきて

雜水のかゝりかけたる八重ゝ山　其角

こゝろ高きは牡丹のうへにこそ　伊賀　東来

草津

嶋月をうつしのこすれ　尚白

沖遠水にうつる清秋　珎碩

霜月霜月

猪まつらかよ物ゝ　赤指

水無月はあをやぎ柳　伊賀　良品

羽黒俳諧　不玉

今ハ世をなのむしのきやの野　尾張　貝菓

屋敷のこゝろもとまるさ海原　去来

一ゝ夜くさむき湯や紙子茶　伊賀　探丸

こゝろこゝろに多賀社の雪　尚白

茶湯こてつゝこゝ見るも秋の日　江戸　亀翁

炭竈ゝ夜頃社殿の倒まら　丸兆

住つゝぬ椿のこゝろや恵火燈　芭蕉

寝こゝろや火燈蒲団のきあの門　其角

門前小家もあるゝ兎屋敷　丸兆

ま兎や切ゝひしゝる屋敷面　尾張　苔境

こゝつゝハ眠る市ゝきこゝ　伊賀　半殘

貧交

まゝ〻ゝ猫子ハ切を譲ゝ　丈艸

浦風や巴をゝ〻すゝ　衡

あゝ儀やこゝ別る交衡　曾良

猫のあと蹈消すや濱千鳥　去来

史邦

背門に乃入にのぼるもろもろ　文州
いりぬるゆきとまりて鳴千鳥　千那
矢田の神社浦のうれなる鳴千鳥　允兆
筏さしつらねる跡や鷺の声　木節
水面をうつして寒の小鴨哉　文州
もろもろ寝入るゆめ余吾の海　路通
起まして探ばらん鷹ほうか　旦藁
襟まとり首引入る冬の月　松風

ちかの戸や鎖のさされて冬の月　其角
かくもりの蒲団もりやみの蹠　長崎　暮年
見やるさえん旅人さし　石部山　大津尼　智月

翁の御れいのき食をとあるる記あり略く

首出してもつ雪をうんしやけ食　美濃　竹戸

題竹戸之食

ふるとめハ我ゆまれあるそて紙食　曾良
魚のうけ粉乃やるせなさ歌仙　探丸

[illegible]数珠のなかす綱代書　文仲

陣白砂よ候す

膝つきよ[illegible]つきまち居る霧れ　史邦

梭梠の葉に霧よ狂ふあり　野童

鶺鴒の鳴くわこほす霊殿れ　伊賀　示蜂

呼ふ[illegible]朝霧ふんあれ　凡兆

[illegible]れ海るまりや朝飯の出る迄　[illegible]所　畫好

[illegible]つ雪や門よ居ぬれ人の種　其角

初雪よ碧部屋のうく軒朗　史邦

[illegible]やけの[illegible]吹くやる雪ま[illegible]　羽紅

[illegible]の[illegible]れ[illegible]の[illegible]寒ま[illegible]　探丸

下京や雪つむよほ[illegible]夜に面　凡兆

[illegible]と門一筋や雪の原　同

信濃路を[illegible]

雪ちるや穂屋に落の刈[illegible]　芭蕉

草庵の留る[illegible]

裏表ハ屋敷あけと菴代哉　其角

雪氏目ハ竹のよ笠うはきする　尾張　羽笠

浮よとも健ふ〳〵こゝろ強し　長崎　卯七

ひしりけてもやゝ雪吹てまとゝ　去来

青垂追悼

乳のこゝろに世を御する師走哉　尚白

うゝ鶯も元也の慶を見れ内　芭蕉

鉢ゝ紀壊ハ部ゝ仏如をもつ　乙刃

一月ハこゝのよ弟ゝ女をゝらるゝよ　文州

住吉奉納

夜神楽や鼻白し面の角　其角

節季偏よ又のゝむへ子神れ　伊賀　須琢

歩ゝやゝちいやゝまゝ掛　同　祐甫

乙刃が新ゝ宅ゝて

人ゝ家をうゝ世ゝ哀ハ年ゝ忘　芭蕉

弱法師下家門ゆゝ世餅の礼　其角

歳の夜や曾祖父を背けふ多枕　長和
ちよす屋敷に下ろす行ふ[illegible]の雪　去来
ふきてもの寒ましけや伊勢の[illegible]　同
大とりや屋敷を捨る人ごろ　羽紅
やらふれて又やもむろ蓑の雪　其角
い孫のとくよいまつ年の暮　路通
金の[illegible]破を襟に幾[illegible]り　松風

猿蓑集巻之二

夏

有明の面白ずやほとゝぎす　其角
夏ごすと墨ちりしの蚊や時鳥　素堂
[illegible]を捨てるこゝもしのびよる　芭蕉
時雨ふるまくらに寒なる　尚白
門を出て行もなさぬ門撫　凡兆
ひる迄さのこいうす時鳥　智月

蜀魂なくやあの子結角櫓　史邦

入れしひきの中やほとゝぎす　羽紅

ほとゝぎす聞かのわすれ　文艸

ふたなき代官屋やほとゝぎす　去来

こひ死を我塚てるひかるなり　遊女奥刀

たゞ一見の時雨やゝ
雲の毛衣とまわられを

去鴉や雲よりそれほとゝぎす　曾良

うきもまぶせにちかせよかんこゑ　芭蕉

旅館庭せまうくさをうえす

菖蒲葉にうつる一ちら　膳所曲水

四月八日詣慈母墓

あやまりつゝる蕨ちの　其角

葉ふれぬ花を梅雨の　江戸全峯

別僧

ちるときの心やとゝ来蠶花（ケシノハナ）　越人

なりもの多る人ゝ　珎碩

箱より出られてすまあるこ
ろもりて

似合しまはけしのつゝやゝの雲　杜國

きくさき白もゆるけしの赤　嵐蘭

井戸するゝ清く清く杜若　半殘

起出くゝ朝の間乃
起くゝのひくゝかゝつゝ　仙化

題去來之嵯峨落柿舍二句

夏椿る炉の本魚屋を名処　元水

破垣やわくゝ扉子ばかり道　曽良

南都旅店

誰のくゝなれば乃国ぶ相　千那

洗濯やきあつゝ柿の赤　尾張 薄芝

豊國よて

竹のゝ力を抜くへき　元水

角けばゝや富蔵ゝ西ゝ　去來

たけのこや雑ぶ物の猪ぶ　芭蕉

猪を吹こえさらしてくれる　正秀

明石夜泊

蜻蛉やとりもちなほす竿の先　芭蕉

見る代や鵜屋祭を鍋一つ　越人

五月三日

瓜の蓄と並べ置くけふの高麗　其角

粽結ふかるるもふさむ額髪　芭蕉

隈篠の房ふるふる餅粽　江戸　岩翁

さびさびて客人やとまりおそ　尚白

五月六日大坂にて死の遠忌を弔ひて

大坂や乃ちあぬ夏乃ゐ十夕　伊賀　蟬吟

奥羽に館して

隻眼や兵たちゆゑん乃蹄　芭蕉

這出よかひ殿乃下代蟷の影　同

（此境にて）

かるかるの角かるけよ法の石　同

五月雨に家ゝの捨てるあるもの　凡兆

ひ孫麦は味なき事やみのもの　未節

るとの謂深草のあるさつき雨　史邦

奥羽名取の郡に入て中将実方
の塚ハこゝとゝ侍まゝ
道ゝわ一里ばかり左り乃方
笠島といふ所に有とゆ
かりつきもなくまゝ
なくまゝ

笠島やいつこ五月ぬかり道　芭蕉

大和紀伊の境ひなる
て往来の駕籠とゝて有

すめらぎハ粉を紙のゝに書つけ侍る

つゝみものとして
袋やみのもの　去来

袋剃や一夜ゝ今情てみのもの　凡兆

月の道や蓑借くさ月あるゝ　芭蕉

徒地や若ゝ草ゝ月あるゝ　羽紅

七十余の老醫ゝ
ものゝ
にゝみの白ゝ
いまゝ時ゝ
るゝ人ゝ
なゝ

ゆるさるる年よりとしとなりぬ

六尺も力はなしや五月あやめ　其角

百姓も麦を取つく茶摘哉　去来

ちるさくらやなほ咲つれ　正秀

つみ合ふ人はなしや麦畠　膳所 游刀

孫と愛して

麦蒔家にてやらん雨蛙　智月

麦蒔て鶯逃ぬ昏よりは　江戸 花紅

志賀の関にて

風流のさかりやいかに田植うた　芭蕉

出羽の三山にて

眉掃を面影にして紅粉の花　同

法隆寺開帳

南無佛の名を拜す

唐禅なつかしき名粉の花　千那

田の畠に至つてひかり蛍かな　伊賀 万子

膳所曲水之楼にて

蛍火や吹ちらされて堀のやみ　去来

野田乃蛍　元禄二句

闇の夜や吾も法師と蛍かな　元禄

ほたるかな船頭酔て居つれ　芭蕉

之越野へ行る時

蛍火やこゝをうろつく八鬼尾谷　長崎　田上尼

あれらは魂と思ひあるぬるかな　尚白

草むしや百合ハ中ごろの夏　半残

病後

ゆるりやかゝらぬ百合の香　大坂　何処

すゞ風や蕗ちらす百合の花　乙刀

機嫌辞を作りて

子やなん其子の母を蚊の喰し　嵐蘭

餞別

たゞさへや蚊屋もつるぬ旅の宿　膳所　里東

うゝ人へよつれ
糸宮する法者よられむけて

みすゝの夜を吉原の冠者よるなれば　其角

傾城や蚤の歩く枕の耳乃宮　文艸

下駄や地蟲なくなる蟬の殼　嵐雪

客ありや長屋かゆる蚊の殼　探志（膳所）

殺く殺生なる蟬の殼　芭蕉

袁さや盲蜂刈る麦の後　櫂市（伊賀）

渡り鳥く藻の花のうつる流れ　元水

舟引の素戔嗚奇々合歓の花　千郷

白雲や鐘ゆるまつる日ぬ夕　史邦

素堂之蓮池邊

白蓮や蓮一枝の捨られま　嵐蘭

日焼田や鳴くつゝ蛙　乙刀

日乃出者と盥の泡ぬ蠟（ソーカ）れ　元水

水色月ぬ鼻つまれる穀雪ぬ　同

月の景やこうれく暑さ半ぬ合　正秀

ちゝ暑く蘚ゆるれ髪の扇　木節

きりんの穀ゆ月ふかし　野童

夕ぐもよりもれて墨をかく　羽紅

青草に湯入かんあつさかな　江戸　巴山

千子の水まくらとしてこの国の玉東

かゝるべくよりかゝる

ちるを人の小神を今や蕎子　芭蕉

水の月や朝ぬるゝ人　嵐蘭

出るまゝる秋を京流まるへる　宗沢

すゝしさや新茶の色　允雅

屋根ふき雲つゝ四のまゝれ　千那

月鉾や四人乃家紙蔦粽　曾良

夕ぐもや岐蓋ひるまゝ　去来

涼しさの

やゝの〻今の毛此歟ゆ仰る物　大坂　之道

猿蓑集巻之三

妹

稲風や蓮ぬすむ人の花一つ　不知讀人

此句東武ゆきさま

素堂

かりがねの初音や歯の風　秋風

芭蕉庵の何おもしろや峰の月　路通

人々仰ぐ猿の面　珠碩

加賀乃金昌寺に宿す

終夜秋風聞くやうらみ顔　曽良

笠原や蹈馬の言葉ぬぎを炉の風　江戸　山川

あるこゝろ炉の中鶏合歓の花　凡兆

しら露や殉の死骨の上の苔あらし　去来

大比叡や雪ちる中の法華堂　野童

三井寺にて蹈まれぬ相の笛　凡兆

文月や六日もまだの夜の似す　芭蕉

合歓の木に月のかゝるや同　伊賀小弁

七夕やあまのかはらの杜若

こゝろ迄ぬるうらの相撲取　去来

朝ぬるる露眠しなれぬ風姿　伊賀

蓮や蓮の夢の覚めぬ及肩　膳所

蛍の宿をとはれぬ嵐蘭

まゝ蛍ゝ中てるり水槽に　秋風

うら枯れ枯れ枯れ枯れ　千那

[illegible] 史邦

[illegible] 萩の[illegible]ある [illegible] 俳歌 [illegible] 具葉

秋月や [illegible] 三川 子尹

遠ひろの [illegible] 羽紅

八瀬北[illegible] [illegible]に遊ぶ [illegible] 業

[illegible]の文 [illegible] 序 [illegible]

まるをく 楊乃 [illegible] 元北

[illegible]

[illegible]

[illegible] 丟来

草刈 [illegible] 萩の露 平田 李由

元禄二年 [illegible] 箱に [illegible] せ [illegible]

[illegible] 三越 [illegible] の国 [illegible]

[illegible] 行 [illegible] せ [illegible]

[illegible]

いつ [illegible] 萩の [illegible] 曽良

桐の [illegible] 蜂の [illegible] 芭蕉

百舌鳥 [illegible] 女郎 元北

初唐 [illegible] 亡人 落梧

雲母まで

病屋に行きむしよ蒔て蛾ぶ　芭蕉

海士の釜さ小海老よまるい　同

加賀の小まとこと宝物として宝四乃
神社の宝物として宝四乃
うつ蒔うつ蒔乃草乃ことに同じ
錦のそれを巻き弁な
うまのあち清よ結ん

むしんやし月甲のよきわ　芭蕉

葉屋や三尾中の雪　尚白

たちおりや翌よ暮る夜月よ　風麥

い世よまてたちの　亡人千子

葉月や名稲よ落る人とん

こと月に蓋のあるまれ　之道

栗稗と月ぬ名なるつ月よ　半残

月見せん伝見の郷乃松部　去来

翁を茅舎よ有て

松たちろう松笠ゆんよ高月絶　伊賀土芳

加茂に詣てゝ源のかゝるを
かのゝ人の
たゝのやしろに神垣
をつくりそへ
自就や拍手ゝ勝のゝ　史邦

友延の六條よりかゝりつゝ
ゝ
ゝ
影ゝたゝてゝ月の朝月夜　伊賀　卓袋

ゝ氏ゝ月の就　乙刃

京筋紫ゝ月ゝ信中月　文艸

の相ゝ月一ゝ　元北

ゝりてゝ月の面　尚白

向の能ゝ月ゝ月ゝ　曾良

元禄二年ゝ北陸
月ゝ氣比の明神ゝ
詣ゝりゝの古例を
きく

月清ゝ遊ゝの月ゝ　芭蕉

仲秋の望猶子を送葬て
ゝる夜の月ゝ月ゝ　去来

明月やゝゝ寺ゝ茶ゝ　膳所　昌房

月入るまで人の居よりうし　羽紅
僧正のいとの小屋ぬきあるし　尚白
初潮や鳴つの浜の花菖蒲　凡兆
一戸や夜もやすがてきもしく人　去来
稗の穂ぬる迄しるうるおひ　越人
澁糟やかつまる峰の蕨岡　正秀
あやまりてきくうぐひす鶯　嵐蘭
一鳥不鳴山更幽

物の音ひとりたく栗山の秋　凡兆
しつまり物のあんじ冥加米　曽良
猿蓑庵のつまと会軒端下　千里
鳩ふくや清水の蕎麦畑　珠碩
上ひやとする迄の稲の穂　凡兆
鱠（ビイユ）釣ひのるNし鯰つり　半残
内の間のふまる面り高燈　尚白
薬を切る跡まくるなりの　其角

言上して鶯の鳴見やうとて　琢磨

この比のやうに稲刈秋　土芳

稲うゑ母よ出て見よかしの　元水

自題落柿舎

柿の木の下枝ちらばしの　去来

ちるぞやうゆかしの下枝の下れば　塵生

肌さむし竹切山のすそ薬　元水

神田孫

それハそれの枝ちらばしの
神田孫の朝ぐもり音　敦足
枝ちらばしの

花すゝき大名気をまつらかな　嵐雪

ひ紅の四五日弱るすゝき　文竹

立ぬる紅のゆかしの　元水

世の中ハ鶴鴨の尾乃ひろ　同

浩奥ハ歯ぬけとうしやの雪　荷兮

猿蓑集巻之四

春

梅咲て人の怨乃悔をあり　露沾

上蔟の山荘よりくるる候しまりて

梅ゝ香や山路猟入る女ぶり　去来

しゐの香や入異牛の角　加賀句空

庭真

梅の香や分利しき流す谷の真　土芳

[illegible]屋豊かなる梅の香 半殘

梅の香や酒のしたたるひびきあり 膳所 蟬角

ひとへの木やけ一筋を蹈のたり 其角

子良餅の焼よ梅のかをへて

陸子良子我一年梅のかを 芭蕉

瘦藪や作りたるわの軒の梅 千那

戻捨て白梅うもれ 凡兆

月當て梅咲ころや屠蘇半房 膳所 支考

暗香浮動月黄昏

入相の梅よりなりぬ山ひくきうれ 風麦

武江よりもとむ猿亭の

殘夢

寢ぶるまで窓の細月や閣の梅 乙刃

[illegible]

[illegible]

夢さめて又一句いでぬほゝ梅　嵐蘭

百八のつゞけて迷ふや扇のもめ　其角

ひとり寝の紙帳ゝゝ初子日　去来

野留や屠蘇の酌く搗る米　史邦

くつ市や雪ふ溝まる家私　嵐蘭

春は月雨よりのなのとゝ　如行

憶翁之客中

裾ぬて草ゝつゝまん草枕　嵐雪

つゝすゝ踏分かゝる路通

七種や踏よゝ朝ゝす　其角

氣まゝ鞭の行根芹哉　文州

ゝすゝやわゝる芹の子　其角

脚ゝ雪ゝゝ日ゝれ　同

鞭ゝきこゝゝ鶴ゝ　去来

鶯の雪踏ゝす　伊賀　一桐

蛍やうち仮一ぬれまちかな　江戸　溪石
うつろふや夜を詠めつくされて　其角
蛍やト駄の歯よりくぼ小田代　凡兆
蛍や宮よりくたりとすんでうつる　伊賀　魚日
やぬの雲を抑うちはすると　探丸
けり蝿はきもの拭へき抑くれ　江戸　卜宅
はうつくとうくへてとられす抑ぬ　同　遠水
ちちと川極楽なれよ抑くれ　尚白

青柳のたれや鯉の住所　伊賀　一喫
夏けや蛤いすす場乃すす　同　未白
待ゆ乃所有ものやうち月　楊水
因て歌よるて
麦めしてやけうち迄猫の妻　芭蕉
うつやまつ切ぬ猫の迄　越人
うきなよかれれ猫の宮の　去来
露沾公にて餘寒の當座

春ひよめきもとめぬ羽織哉　龜翁

松の表紙ちらし二百部　尚白

出うりや梅よりあまれるうめ　龜翁

世を知や初うりよ物あるは　嵐雪

貴賤のかれるまあの芽ぶれ　凡兆

白魚や海苔ハ下新の合せ　其角

人のうりよりうまれ梅酒　尾張　杉峯

まうるはたるも出ぬ　元志

陽炎や取つきあるる言葉上　荷兮

ひけ物やなれあるあるる　百歳

うけうりやほろ〳〵屋の物　土芳

世ゆめのごとあるよ虚木立　氷固

野ろるよりあるるす梅邸　凡兆

うけ物や紫胡の糸の屑屋　芭蕉

いとゆめよ良引のくせ作獨活　伊賀　酡力

物咎の塵よりわるれ　嵐雪

彼岸まくさむ一夜二夜の路通
ものもいや帝はたらて涅槃像　野水
義盛妻袁八燕乃かすし道　九兆
立さつく今や紀の子八日の月　伊賀　沢雉
参詣や屋のの草ふ紀ぬ　嵐雪
うるしよりみて
高野や山ちる法門　猿雖
不性さ屋かさ起さ寿の為　芭蕉

参詣や四義のつ孔雀貴　史邦
ちるまのあるや軒ふる花　羽紅
泥亀や四代の昼つ山　史邦
蛙こまる未来の行や鳥の巣　昌房
振舞や下戸ちるさ寿孔雀　去来
長屋さこすれ雛の好義の石　伊賀　萩子
桃柳くらあるやをんの子　羽紅
うくけ赤坊ちるの卯　三川　烏巣

里人の賄屋〳〵る田螺哉　嵐雄

蹄の痕〳〵一夜宿よりの菊の露　半残

帝鶯切て白根の嶽を乗る　加賀山中　桃妖

いつの間にこてるもすもや潦　伊賀　園風

月の影やこゝれたの親すめ　珠碩

花の鏡ぬむ春の雨やあすの縁の先　土芳

閑の花や菓子とりてゝ衛　芭蕉

越ら飛鳥めとして鏡の
つるのちやくゝ道

うゝ山路をきもちのく

鶯は菓の梺の枯枝より月ハ出ぬ　凡兆

うすくらうみんなる雪のうら　伊賀　石口

子や御ん餞り雪なるあり　枚風

ひくらのゝ中は抱子や雑あり　芭蕉

芭蕉葉のふるきを訪

菖蒲小鍋汲てあるやれ　曲水

木瓜籠張〳〵て見るく抱ふ　江戸　山店

畫讃

山吹や宇治の焙炉(ほいろ)の匂ひ　芭蕉

白玉や椿よりなほ椿哉　車来

わすれ草やひらひらとかなしかな
あやめ草ふけばこんもり
ちらちらと山吹
ちらちらと白玉

笻(カラカイ)もて花を生やす柳哉　羽紅

蹣跚(よろめき)おりる山路の蕨哉　津國山本坂上氏

うつくしの笠ぬぎ捨てる橋の上　芭蕉

ちらちらと過るさくらの花びら　伊賀　利雪

東叡山にあるぬ

小坊主も雪よりあつまりてふきまはる　其角

一枝は地にあるもの山ぶき　尚白

雛の形のきえゆるやまの梅　凡兆

まんまんと枝をのばしたる梅　文艸

雪消のつゆ迷ひ迷ひ逝きしかな　史邦

雪の森よりつもる花の雪　千那

蔦城のあるじをとふる

牡丹咲て寺に籠る人ありと聞て

芭蕉

いづの国花坂の庄八幡の社頭に詣

侍れば八幡宮縁起に云

ふるさとを云伝へ侍る

同

一里ばかりに花坂といふ

三文の墓東武谷中にあり

三歳にして死せし幸の子孫なり

墓のまへに桜植置

行るよりかなしく安れ侍るこそ

つくづくと桜をたづね侍りよ

他の墓行さとふらるれば

園風

去来

元北

まさりやは花咲ぬ野の往還り

知人よあるじとまうでられ

ある僧の嬰児の死に

浪人のやどりとなる

冬を春の夜あれうる紙鞍

脇きられ花は捨へ

半残

伊賀長眉

大学やうしに奥のあるよ

しられぬ人の法をとく

奥乃あの果

曽良

道灌山よりのぼる

[illegible]　嵐蘭

源氏の[illegible]

探子に[illegible]　羽紅

庚辛の歳家を建て

[illegible]　加賀　北枝

[illegible]　江戸　凡兆

酒業[illegible]　普船

大和路の時雨

草[illegible]　芭蕉

[illegible]　探丸

[illegible]　智月

[illegible]　山川

[illegible]　伊賀　式之

木曽塚

其[illegible]　乙刀

春秋行きかふ人や夏の堂　曾良

望湖水惜春

行春を近江の人と惜しみける　芭蕉

猿蓑集卷之五

去来

鳶の羽も刷ぬはるの暮　芭蕉

一ぬきに見ばや五月の雨雲　凡兆

股引の朝うめいてたのもしす　史邦

たばこ切ばかりの残雪の山　蕉

まつ戸明る雪の朝　蕉

人まねする名物乃梨　来

ウ

かすみてる墨猶ゆかしく燈籠
ともしつゝあるやの長閑
行事を手こゝの門はたつるわ
里人ゝ初午の貝ぬく
ほつまする去年の孫こゝあらく
笠蓑はなれのとちる
吸物さへ梅はすぼ
三里あまりは道うんける

邦
兆
来
蕉
邦
兆
蕉
来

この秀を盧同の男居あわせて
さ一本つまする月の秋夜
笠ぬぎ花を無つるを水鉢
ひゝわ無一と鉢の駄ち
いちとせに二日月地喰て
雪けふさむき鳴北風
火とゝに寄れば登る家雪
ほゝまれ皆鳴仕舞ち

邦
兆
蕉
来
邦
兆
来
蕉

疲骨ゆまるは起居力なるべ
陸をとりて車引こむ　兆
うきくを枳殻垣よりうちこん　蕉
いまや別の力より生ず　来
せつけふ帰てらをうたち　兆
ゆきひ切るる和てひとよ　邦
青天よ有明月の転りけ　来
湖水の秋乃波良ゆるる　蕉

紫の戸や蕎麦めすまれ歌をよむ　邦
ぬのこ若習ふ毎月ぬ道　兆
狩合て寝くハ又をつらわるる　蕉
ものはれ乃まる赤を　来
一撞鞦つる窓のくれ　兆
枇杷の石屋ゆ　邦

芭蕉　九
凡兆　九
史邦　九

市中ハ物のほしやすき月　凡兆
あいしらくと門〳〵乃菊　芭蕉
二番草取のこす畑よ雲ゝ　去来
戸ゝくらくらあ一枚　兆
けふ鮒ハ銀のうんまうす貫目とよ　蕉
たゝとしに長ら招指　来

草刈り蛙こハうるさまくて道
路乃芽さゝりに切ぬ伊勢乃国　蕉
道心の杖ハ赤ハ赤ハ赤ハ赤ハ赤ハ
雑炊に七尾の冬ハ住うきを　兆
魚の骨さゝりつる迄の老を経て　蕉
待人入て小庵の鐘　来
立うち屋風を倒す女哉　兆
湯屋ハ竹の簀子俺しを　蕉

茴香に実を結ぶ白鼠　来
信やさしく寺うつくしき　兆
さる引の猿と世を経る妹の目　蕉
年に一年の地をうるや　来
五六寸生木つけし家鶏（三ウタリ）　兆
見代ふ墨絵の石　蕉
追て早よ宿る乃刀持　来
てゝちゝ何ぞ水こほりし　兆

戸漬ものむろかしの煮殺　蕉
てん茶まつりわいつくつく　来
ころ〳〵と草鞋を作る月夜さ　兆
蚤とりしよ起しの初秋　蕉
そのまゝにころひ落る林落　来
ゆゝみて蓋のあいたる半挿　兆
草庵よ新酒に招てよりつる　蕉
いのち娘を撰集れまる　来

ウ
さまゝよ品ゝる高きて　兆
法華の果て皆小町なら　蕉
あたゝかう粥すゝるほゝを　来
ほゝるゆとなまゝ庵を粉麦　兆
多代しに風と遠ハする夕ゆ　蕉
かすゝこゝぬ夏の秋もさ　来

凡兆　十二

芭蕉　十二
去来　十二

庚汁稲の辛味やとりきりそ　凡兆

あぶくしかすりて青寝する秋　芭蕉
彩雲多なりし月のけさ　野水
ゆくへて蛾しかすかなる　去来
手代孫へも物を振く子同て　蕉
昔は書にたひしり雪降　兆

ウ京出て肱る餘る寒の弱　来
廣郎と云る和尚よりたる　水
中ゝに詠へハ風薫　北
蛙の音をうまて音絶ぬ　蕉
ものみすひろ六月ハ忘れ侍む日　水
遠ひろまる屋ゝの夏　来
金鍔と人よりて夏のやすき　蕉
あり風を吹る月青く月　北

町の秋の文奴哀やゝ　来
行ゝとゝんゝ夜ゝ嵐ゝ　水
ゝ行ゝ雨ゝ西ゝ会ゝ夜ゝ　蕉
ま月ゝ郎ゝ笠ゝ春ゝ　北
名
ゝるゝ山陰ゝ西ゝ　水
柴ゝ家ゝ　来
ゝ乃ゝ　北
旅ゝ地ゝ有ゝ　蕉

すきぬきを女性なりとうたへる　来

何ゆゑしら雲の根乃なりく　水

夕月夜星の貴き代に廻る　蕉

人もすれ〳〵あるこの水　兆

うそつきに自慢いとをかし　水

又もたらす北鄙を立ち出す　来

提らの田の青やをていさま　兆

加茂乃やしろハ独を社なり　蕉

拍子に成屋敷をすて　来

雨のやうに成手帯迅速　水

屋敷に成る雲雀の羽ばたき　蕉

ちらく水る簡ぬうらん　兆

糸掛脱いけもの成ぬ　来

春を三月曙乃うら　水

芭蕉　九
野水　九
去来　九

餞乙刃東武行　芭蕉

梅の葉まりこれ有のそうけ
かさあるつゝしを春の雨　乙刃
五云薩の〳〵四国より五指ける松　珠碩
まつ〳〵も紅よりてうれよその梁　素男
乃隅より出歯〳〵えて春の月　刃
二階の客をもてまれるあさ　蕉

放やるうつせみの跡はなくなす　男
稲の葉延乃力なきこゝを　碩
ちらしんせ初しこけるを於庵に　蕉
四義頭と吟ハ〻ゝ　劔
卯の刻乃無月に無毎中の方　碩
すゝまるれの志川うるうち　男
萩の礼すゝまの礼よりて　劔
牡丹ちる百舌ちるの一聲　智月

懷よりをあるもるる姿の月　凡兆
内ちるまるぬるの海つら　劔
絶の柄ちをするるるれ　去来
原まるちすかりの跡　兆
名　喜代日よ仕事葉てくる強机　正秀
店屋物よ秋のまらう　来
汗ぬるひ湯のまりの清の糸　半残
ちれ世ちまき雛乃下　土芳

大騰よりおもしろい世界をて　殘
身はめれ紙の取所なき　芳
小刀乃蛤及なる細工こと　殘
棚よせとりすす大年の夜　園風
こそこそとわるの後の屠　猿雖
むしおす合せそこるかすぬ　殘
世をもうれめをせこる破扇　風
碧池移せこそ自説　雖

ウ
嗟琴の陳ハちこそ緑つもひ　芳
係へハこそこそんな顔　風
那なこそ孫をおりひる金沢盆　嵐蘭
うすをかる乗の割下駄　史邦
花よりこそ出まる宝こ　野水
雛の被を際こる毛　羽紅

乙刀　五　　土芳　三
珠碩　三　　園風　三
素男　三　　猿雖　二
智月　一　　嵐蘭　一
凡兆　二　　史邦　一
去来　二　　野水　一
正秀　一　　羽紅　一
半残　四

猿蓑集巻之六

幻住菴記　　芭蕉翁

石山の奥岩角のうつくしき
国分山とかいふ国分寺の名を
伝へ侍へり　拝殿に初瀬流を移
す　翠巒よそをそばだち三曲二百尺
に八幡宮あり　世に知る所の神体
八体陀の尊像とや　唯一の霊

甚忌嫌する事を兩部光孝和尚
利益乃塵を同じうしたまふ
又貴し日比たゝ人の詣さわられハ
いとゝ神さい物もつゝみる傍よ伯
捨し草の戸をさすき根笹軒
をもるゝ風よりも堅為て狐狸
ゆゝしきをはるゝ幻住庵と云あり
の僧ゆゝハ勇士菅沼氏曲水子と

伯父よりん侍りを今八年ヶ
むかしよ俳諧を幻住者人の名を
のゝ孫なり市中なさ事又市中なさ事
十年計よりてゝ十年やちき
永年義出の今のを失い蟠手
家を離て風奥羽象潟の景色日
ゝ風をゝゝるすることあゆゝ
ゝゝき北海の荒磯よりひて

破りて七歳湖水の波に漂泊の
浮雲の流れにまかせ[illegible]
乃陰なのもしく軒端萩ある毎
[illegible]に花の盛りを和月に
初いとうらめたへ山やそ出
しとさへ[illegible]ひとうぬさ[illegible]春
の[illegible]も[illegible]つゝ咲ありし
山霧雲[illegible]

程宿うゝ[illegible]
のはゝ[illegible]
[illegible]

南よりうを身
山[illegible]来中よ[illegible]
[illegible]に塔り南薫[illegible]
北風[illegible]
[illegible]
[illegible]

未蕉の新蓑屏の小図を写し留とる
亦蓑名ふみ字此をよみ水鶏ほた
和音義景地をてんめいとこと事
ゆゆゆゆの三上山八十峯此俤よ
ゆゆゆいて武蔵野を古き掘かなりし
いてゝゝ三田上山を古人をうなさそ
う山嶽千丈の峯袴腰といふ山る黒
津の里いくゝ年ありて洞代る

ようとうみうんの家集の深あり
うの杉跳石をとゝあるゝ奉と杉乃
宮よ遠のほう松の柳作菓の図屋
を数〻樣の腰掛と名付彼海棠
よ菓をとゝるゝ主人清宮を養を
花へる王翁除俗の徒とあゝ唯聴
辟山民と助て屠顔を見をとるけ
ゆゝ空山よ風を折て屋スるま

く心まことある時て谷の清水を
汲て自ら炊ぐ
一炉の傍へいろり
炉よんろ仕の
る拍子木打佛一間を隔て夜
の独ねもへるやうなといふ
へりさぶを能業る法の信ぜ
か歳の甲斐行う嚴子てはし

洛よのほとりへうろうろ者なる人を
して額をとらいとやうと年
深く幻住庵のこと宮を過ぎ
草庵の記念さのぬすへて山居を
し旅寝と云さる器をふ
寸木の丸橋笠越の変義
枕の上に柱よ鼠の屋八幡
ぬへくよんを動しあるに宮寺の箱

里の行のとた入事ていの事乃稲
くしあ〻〻鬼の豆知ようよりを
家内ようの農談月院より山の猪よ
りまて夜屋鶯より月を給てい
鶯を伴し独を取て園雨より豆腐
をとうすくいへとてひるゆるよ
深家を好と山野より路をかくせ事
とこあるやく病人より使て走

をいとしく人より情事月此
物を拙を身此稱をなるよ
あるを仕官命此地をとう
やと一しい佛離祖室の扉より入
ら事とて多なるを見
よ身を世あ元鳥此情を房して
書を生涯のとわ事とへなれを
孫より弟云ひ月て此一節よる

[illegible]樂天八五[illegible]みとやつり老枝八
瘦[illegible]賢愚文質のしゝ[illegible]
[illegible]つまり幻の柄[illegible]
[illegible]ぬ
[illegible]

題芭蕉翁國分山
幻住菴記之後

何世無隱士以心隱爲賢
也何處無山川風景因人
義也間讀芭蕉翁幻住菴
記乃識其賢且知山川得
其人而益義矣可謂人与
山川共相得焉迺作鄙章
一篇歌之曰
琵湖南分國分嶺

古叢鬱兮緑陰清
蕭屋竹樣纔數間
内有佳人獨養生
滿口錦繡輝山川
風景依稀入誹城
此地自古富勝覧
今日因君尚益榮
元禄庚午仲秋日　震軒具州

儿右日記

曲水　野水　去来　凡兆　千那　珠碩

贈紙帳

地をよる孤ぶ　野徑

いりまして路の家ちかくなる　里東

蛍飛ぶ井のもとの蓮の葉　乙刃

顔や薄月の中に花ちる　膳所　怒誰

白ゆり一家ちかく有り　探志

五月六日菴ちかくすんと雪　元志

まつてゆる水鶏の　膳所　泥土

笠あみ出て柱すゝ風の色　史邦

月待や海を屋根よりすこし　正秀

ちつさい家の家流れ清れ　元人　柳陰

涼しさに来うち推らむ　如行

訪よ留らむ

椎の木をくゝる蝉の　膳所　朴水

同地下や毎年よ海涼　美濃瑞井　市隠

之よ云ふ

猪所来や早苗のよう涼　半殘

麦乃粉を出産す

一袋これや鳥羽田のこゝろ麦　之道

書音

一隻入るゝ山さハらや橋のすゝ　長崎　昌町

白立や橋本の奥ハ一まゝ　及肩

羅紗絹掛

絹ひや田ゝ山ハ橋ゝ　尚白

贈簑

ゝ山のまゝあるみのゝ糸卯　北枝

木履ゝ倩ゝ蓼太　木節

包紙ゝ書

袋ゝ茶の窓　扇

稲のゝこれを佛花出産卯　智月

石山やゝ果ゝ蜂の巣　羽紅

橋の梅やゝれて明るむゝ　昌房

里ハゝ夕めゝとるゝあゝ卯　何処

啼やいづくに[illegible]

越人

越人に同じく訪合て

笠の雫代借よ[illegible]入菴に

等哉

明年弥生尋問菴

寒菊やあるじ[illegible]

嵐蘭

同笈

涼しさや[illegible]

曽良

跋

猿蓑者芭蕉翁滑稽之首譁也

非比彼山寺偸衣朝市頂冠笑

只任心感物写興而已矣洛下

逸人凡兆去来随翁遊学棋館

竹窓躍等凌節斯有歳屬撰此

集玩弄無己自謂絶超狐脇白

裘者也於是四方嗑友憧々往

来或千里寄書々中皆有佳句
日蘊月隆各程文章然有昆仲
騷士不集録者索居竄栖為難
通信且有旋倪婦人不琢磨者
兼言細語為喜同志雖無至其
域何棄其人乎哉果分四序作
六卷故不遑廣搜他家文林也
維時元禄四稔辛未仲春余掛
錫於洛陽旅亭偶會兆来吟席
見需記此点題昏尾卒援毫不
揣拙庶幾一叢高張有補千詞
海渙人云

風狂野衲
文艸漢書
正竹書之